

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 11 月 2 日現在

機関番号：27401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K17242

研究課題名（和文）衣料産業におけるグローバルな都市間分業 持続的都市成長の原動力

研究課題名（英文）Sustainable Power of Urban Growth from the Standpoint of the Global Division of the Industries of Upscale clothing

研究代表者

三田 知実（MITA, TOMOMI）

熊本県立大学・総合管理学部・准教授

研究者番号：20707004

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、都市成長の原動力のひとつである衣料文化生産が、衰退傾向にあった街区の成長を促すと、その後どのような社会過程を産み出すのかという問いを、現代都市社会学の観点から考察を深めてゆくことを目的としたものである。

高級街区・表参道と、都市細街路・裏原宿は、都市空間の記号価値生産をつうじて、空間の交換価値を産み出すための不動産投機が過熱している。表参道界隈の高級街区や都市細街路のビルが、経済的利益を生み出し続ける手段とされている。都市衣料文化生産とグローバル経済が結びついたことを見だし、都市社会学の文脈で考察を深めた。これが本研究の概要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

それは高級衣料文化生産と投資を結びつけた、現代都市社会学研究としての学術的意義である。本研究が調査対象地としてきた、高級街区・表参道を事例とした調査を行ってきたところに、研究の独創性を見いだすことができる。

つぎに本研究は、空間の記号価値を意図的に生産し、絶え間ない更新が行われる。それにより交換価値が生み出されることを捉えた。それによりグローバル高級衣料ブランド巨大資本の金融不動産部門への参入を明らかにできた。そこにグローバル都市、都市文化生産と、空間の生産を結びつけた現代都市社会学としての理論的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This paper is uncovering the change of the Main Street and close alleys of backside in Omote Sando District Tokyo, from the standpoint of the sign value of urban space and investment. The first, the close alleys were residential street until the 1980s. However, from the 1990's, the close alleys changed to the global hub of upscale clothing design. This change generated a sharp image of the Omote Sando with the magazine exclusively for fashion. The second, bright image of this district attracted many investment companies. The investment companies and large company of upscale clothes are making some spatial renovation of the buildings. These processes make the land prices in the Omote Sando raised slowly until now.

This finding makes sign value of urban space secure connection to the global economy the investment leads. The significance of this research is discussing sustainable urban growth, cultural production and global urban Sociology.

研究分野：社会学（都市社会学）

キーワード：都市社会学 都市衣料文化生産 地域社会 不動産投資 グローバル経済

1. 研究開始当初の背景

先進諸国では1970年代のオイルショックをきっかけとし、大量生産体制の危機を迎えた。それまで先進諸国の経済成長を支えてきた各種製造業の工場は閉鎖され始め、新興国を中心とした海外生産に転じた。この現象は、衣料産業にも大きな影響を与えた。

1980年代以降の衣料産業では、グローバルな再編のもと、都市間分業体制が発達してきた。衣料そのものの製造は新興工業諸国の都市で行われる傾向が強まり、衣料の付加価値を決めるデザインは、とりわけ先進国諸都市で行われるようになった。その拠点となった東京都渋谷区神宮前の都市細街路・裏原宿は元来住宅街であったが、1980年代後半の土地資産バブル期に地価が高騰すると、固定資産税や相続税の支払いに苦慮する住民が発生し、その多くは開発業者に土地建物を高額で売却して他の場所に移住した。一方で住み続けることを選択した地元住民は、家屋を低層ビルに建て替えた。そしてテナントとして、分業体制の進んだアパレル業界においてグローバルに活動する純粋生産指向のデザイナーや、セレクトショップを入居させた。

同じ頃、高級街区・表参道では、グローバル高級衣料ブランド大資本（以下、大資本と表記）の路面店や日本法人の事務所が集積し始めた。大資本は1980年代、グローバルに拡大したデザイン、製造、流通、販売過程を、自社内部で一括管理することが困難になっていた。その結果、従来自社内部で対応してきた部門の外部委託が活発化した。そこで、純粋生産志向であるがために経済的基盤の安定しない、先進国諸都市の細街路を拠点とするアヴァンギャルド系（前衛的）デザイナーに対し、大資本からのデザイン委託の頻度が高まったのである。

アヴァンギャルド系の衣料デザイナーたちは、世界五大コレクションに出展するための純粋生産活動に必要な経済的資源を得るために、大資本デザインの研究開発を行ってきた。こうして、衰退傾向にあった細街路が、衣料デザインのグローバルな研究開発拠点へと変容したのである。

地元住民は、上述のデザイナーの事務所や個人事業主により経営されているセレクトショップを入居させ、家賃収入をもとに税金を支払いながら、金融資産を増やすことができた。こうして家主・地権者となった地域住民が、衣料デザインのグローバルな研究開発拠点機能を下支えすることとなった。同時に、衣料文化生産者である高級衣料デザイナーやセレクトショップの経営者が、地権者としての地域住民の日常生活を支えるようになった。

つまり、高級衣料文化生産者によるグローバルな純粋生産（定義は後述）と、地域住民によるローカルな日常生活が、相互に依存しあっている。このことが、住宅街であった都市細街路を、ファッションストリートとして発展させる重要な要素となってきたのである。

そして2000年代に入ると、グローバル経済をけん引する不動産投資法人が、東京都渋谷区神宮前の都市細街路に集まる高級衣料デザイン部門、小売部門や衣料関連メディア部門をグローバルな流行を生み出す主体として評価し、投資を開始した。不動産投資法人はこのエリアで低層ビルを投資物件として取得してきたが、オーナーであった住民を借り手にするなどの専門知識を駆使した土地資産運用を開始する事例が、現地調査から明らかになっている。都市細街路・裏原宿に高級衣料のグローバルな純粋生産と、派生型グローバルな流行となる衣料デザインを行う事務所が集積したことで、この地域では、町会、商店会という地元住民を母体とした組織と衣料デザイナー、そして都市コンサルタントや不動産投資法人が結びついた新しい地域集団が形成されている。

2. 研究の目的

本研究は、グローバル経済の成長により生まれた高級街区と、その裏にある、衣料デザインのグローバルな拠点として社会的、文化的、経済的に成長した都市細街路が、具体的にどのような体験をしてきたのか。本研究はこの問いを明らかにし、都市社会学の文脈で考察を深めることを目的とするものであった。

3. 研究の方法

本研究の調査対象地は、東京都渋谷区神宮前2丁目から6丁目の元来住宅街であった細街路である。なお、現在の神宮前1丁目は旧竹下町で、現在の竹下通りがある地域に該当する。神宮前2、3、4丁目は旧原宿、神宮前5、6丁目は旧隠田（穩田）である。隠田は神宮前の南側で、渋谷駅に近い。旧原宿と旧隠田に該当するエリアに現在、高級衣料デザイン事務所や高級ブランド衣料小売店舗が集まっている。なお神宮前3、4、5丁目は、東京都港区南青山にも近接している。また神宮前6丁目は渋谷区渋谷、渋谷区東という場所にも近接している。

2022年1月1日時点の町丁目別人口は、神宮前1丁目が1929人、2丁目が3433人、3丁目が3067人、4丁目が1105人、5丁目が1980人、そして6丁目が904人である（2022年1月1日現在、東京都渋谷区「住民基本台帳に基づく人口」）。

本研究は、事例として以下の三つに焦点をあてる。一つめの調査対象は、都市細街路・裏原宿を

拠点とする、東京のアヴァンギャルド系の衣料デザイナーである。アヴァンギャルド系とは、1980年代にベルギー・アントワープで興隆した、商業主義に傾倒したファッション業界、とりわけオートクチュールに対する批判的価値観を持つデザイナーたちが生み出した衣服デザイン系統のことである（高木・東京オペラシティアートギャラリー編、2008）。

1980年代以降、このアヴァンギャルド系を生み出したデザイナーたちは、パリ、ロンドン、東京やニューヨークといった先進国諸都市にデザイン事務所を構えた。とりわけ彼らの事務所は、大資本高級ブランド企業が立地する街区近隣の細街路に所在している。彼／彼女らは、作品としての衣料デザインを国際的に発信しつづけることで、世界諸都市のデザイナーのあいだでグローバルなネットワークを形成してきた。そこを基盤とし、これまでにない芸術性を備えた、非通念的であった衣料デザインが、グローバルに普及し始めている。

一つめの調査対象者への調査方法は次のとおりである。東京都渋谷区神宮前の細街路調査に際し、筆者は、2002年3月から2003年3月まで、南青山3丁目のカフェレストラン「F」の立ち上げスタッフ・料理人として深夜の時間帯に参加した。このさい、当店のオープンに関わったひとびと、店舗の常連客である衣料デザイナーにインタビューを行ってきた。

また深夜の料理人を辞めたあとも、深夜の常連客として通い、客であるデザイナーたちにインタビューを行った。調査における標本抽出の方法は、この店にあつまる友人・知人や、彼／彼女らの伝手をたどるスノーボール・サンプリングによるものである。

筆者は、120名ほどのファッションデザイナー、ブティック経営者、カフェ経営者、ジャズミュージシャンやクラブDJと接触した。筆者は調理の休憩時間帯、「F」のスタッフとして、この店に来店するアヴァンギャルド系のデザイナーたちと話をすることができた。

筆者は、研究のために店で働いている旨を客や客の友人に伝え、彼／彼女らと友人関係を形成した。そして半構造化面接と非構造化面接によるヒアリングをつうじ、彼／彼女らの活動内容を記録してきた。ヒアリングの大半は、「F」のオーナーであるヒロキ（仮称。当時35歳）の外出時に同伴した際に行われたものである。

二つめの調査対象は、メガバンク系不動産投資法人とグローバル高級ブランド巨大資本である。2013年から16年にかけて、神宮前（旧原宿・隠田）の都市細街路において、不動産投資法人とデベロッパーを対象に、投資を行う方法について調査を行った。さらに筆者は、大手不動産企業社員や大手商社社員への聞き取りや地元の資料調査を行い、文献を通じて不動産投資信託に対する理解を深めた。

この対象には、2002年から15年まで、高級ブランド衣料品店や高級衣料デザイン事務所などに対して調査を行った（2008年から18年にかけての調査は断続的に行われた）。まず、衣料デザイン事務所と衣料小売企業向けのフィナンシャルプランナー（現在は福岡市在住。週2回東京へ向かう）への半構造化面接によるものである。そればかりでなく、コンサルティング企業の代表取締役に対し、半構造化面接を行った。それにより、衣料文化生産街区における不動産投資に関する情報を得た。

これらの聞き取り場所は、2008年から16年3月にかけては、六本木西麻布交差点付近に所在する、高級衣料ブランドのプレスリリーススタジオで行い、その後は、東京都渋谷区神宮前の細街路にあるカフェレストラン「ロータス」で行った。2016年4月から今日までは、筆者と彼／彼女らにとって利便性の高い、天神V I O R O（三越伊勢丹系の商業施設）のコーヒーショップや、西鉄福岡駅のソラリアステージ内のコーヒーショップであった。

聞き取り結果に関しては、マニラ在住のフィナンシャルプランナーや、コンサルタントからの説明とREITに関する文献を照合し、ズレが生じていないかどうかについて確認を行った。

三つめの調査対象者は、東京都渋谷区神宮前における地元の住民である。筆者は、東京都渋谷区神宮前の住宅街に長い間住んできた人々に対しても調査を行った。

まず2005年1月26日に、神宮前6丁目に住む元隠田町会長のT氏に調査を行った。隠田住民会館にあつまる地域住民とともに、半構造化面接によるものである。この日会館に集まったT氏と住民たちは、青山学院大学経営学部教授の井口典夫教授から紹介してもらった人びとである。

次に、2011年3月7日、10月8日と12年9月13日に、神宮前6丁目に住む、前隠田町会長のS氏への調査を行った。半構造化面接を実施した。実施場所は、神宮前6丁目に所在する、彼の経営する不動産屋兼婦人服店である。筆者は2010年代初頭から、表参道原宿地区のなかで唯一の商店街として位置づけられてきた「隠田商店街」が存在していた神宮前6丁目（旧隠田）の町会長と、隠田商店会会長を務めた男性（現在は地元不動産業者）、および表参道の裏側に広がる都市細街路に住む地元住民に対し、聞き取りを行ってきた。聞き取り実施の場所は、神宮前6丁目に所在する不動産屋兼婦人服店や、近所のコーヒーショップである。2011年における調査内容は、隠田の過去の商店街から現在までの空間変容過程における地元住民の役割であった。なお神宮前6丁目に、旧原宿の住民や、旧・隠田の住民が定期的に会合を行う大きな集会所があった。また旧・隠田に都市銀行退職者が2名住んでおり、土地資産の運用に長けた知識を保有していた。それゆえ調査対象者のうち、神宮前6丁目の住民が多くを占めている。

4. 研究成果

高級街区・表参道では、グローバル高級衣料ブランド大資本（以下、大資本と表記）の路面店や日本法人の事務所が集積し始めた。大資本は1980年代、グローバルに拡大したデザイン、製造、流通、販売過程を、自社内部で一括管理することが困難になっていた。その結果、従来自社内部で対応してきた部門の外部委託が活発化した。そこで、純粋生産志向であるがために経済的基盤の安定しない、先進国諸都市の細街路を拠点とするアヴァンギャルド系（前衛的）デザイナーに対し、大資本からのデザイン委託の頻度が高まったのである。

アヴァンギャルド系の衣料デザイナーたちは、世界五大コレクションに出展するための純粋生産活動に必要な経済的資源を得るために、大資本デザインの研究開発を行ってきた。こうして、衰退傾向にあった細街路が、衣料デザインのグローバルな研究開発拠点へと変容したのである。地元住民は、上述のデザイナーの事務所や個人事業主により経営されているセレクトショップを入居させ、家賃収入をもとに税金を支払いながら、金融資産を増やすことができた。こうして家主・地権者となった地域住民が、衣料デザインのグローバルな研究開発拠点機能を下支えることとなった。同時に、衣料文化生産者である高級衣料デザイナーやセレクトショップの経営者が、地権者としての地域住民の日常生活を支えるようになった。

つまり、高級衣料文化生産者によるグローバルな純粋生産（定義は後述）と、地域住民によるローカルな日常生活が、相互に依存しあっている。このことが、住宅街であった都市細街路を、ファッションストリートとして発展させる重要な要素となってきたのである。

そして2000年代に入ると、グローバル経済をけん引する不動産投資法人が、東京都渋谷区神宮前の都市細街路に集まる高級衣料デザイン部門、小売部門や衣料関連メディア部門をグローバルな流行を生み出す主体として評価し、投資を開始した。不動産投資法人はこのエリアで低層ビルを投資物件として取得してきたが、オーナーであった住民を借り手にするなどの専門知識を駆使した土地資産運用を開始する事例が、現地調査や先行研究などから明らかになっている。

1980年代の土地資産バブルの盛衰以降、高級街区・表参道と、その裏側に広がる住宅街である都市細街路「裏原宿」は、グローバルな衣料文化生産を原動力とした都市成長を経験した。そして現在、グローバル経済をけん引する投資が、表参道と裏原宿における都市の経済的成長を引き起こしている。こうして高級街区・表参道と都市細街路・裏原宿が、投資と強く結びつき始めた。

都市細街路・裏原宿に高級衣料のグローバルな純粋生産と、派生型グローバルな流行となる衣料デザインを行う事務所が集積したことで、この地域では、町会、商店会という地元住民を母体とした組織と衣料デザイナー、そして都市コンサルタントや不動産投資法人が結びついた新しい地域集団が形成されているのである。

1980年代以降の衣料産業では、グローバルな再編のもと、都市間分業体制が発達してきた。衣料そのものの製造が新興工業諸国の都市で行われる傾向が強まるいっぽうで、衣料の付加価値を決めるデザインは、先進国諸都市で行われるようになった。高級街区・表参道と都市細街路・裏原宿がその舞台であることを、本研究は描いてきた。

とくに衣料デザインの現場では、世界中のひとびとや場所とつながる想像力が重要となる（Appadurai, 1990=2002）。その源泉となっているのは、デザイナーやバイヤーたちがその活動を通じて作り上げてきたグローバルなネットワークである。本研究で紹介したように、彼／彼女らはファッションを基軸としながらカフェの経営も行い、自分たちのコンセプトが色濃く反映された場所を形成してきた。そうした場所において時にはリアルな交流も行いつつ、都市細街路に形成されたファッションの下位場では、あたかも裏原宿とアントワープが同期するような感覚が醸成され続けてきた。

つまりピエール・ブルデューが言うところの、「場（Champ）」という想像上の社会空間をもとに、グローバルな高級衣料生産の場が形成されているのである。この想像上の社会空間であるグローバルな場を想起する高級衣料文化生産者は、グローバルな純粋生産と派生型大量生産をコントロールしながら、衰退傾向にあった都市細街路を、「裏原宿」として成長させてきたのである。

そして現在、高級街区・表参道と都市細街路・裏原宿は、投資と強く結びつき始めた。サッセンが言うところのグローバル都市では、金融派生商品という投資が産み出されている。こうして、グローバル経済のコントロール機能に必要不可欠な知識生産に、高級衣料文化のグローバルな純粋生産と大量生産（流行の生産）、すなわち文化生産が結びつきながら、高級街区・表参道と都市細街路・裏原宿が持続的都市成長を続けている。

ただし、こうした都市の持続的成長は、長続きしないこともあり得る。本研究が事例としてきた高級街区・表参道と都市細街路・裏原宿では、高級衣料文化生産者、セレクトショップの個人事業主や地域住民だけでなく、外資系高級ブランド大資本、巨大資本や投資家までの利害が一致した。それにより、グローバル経済に外資系高級衣料巨大資本が参入する流れに乗ることになっ

た。現在の裏原宿の地域住民がオーナーである低層ビルのなかには、REITの対象となった物件もあるが、地域住民も高齢化している。渋谷駅や新宿駅周辺の大きな再開発が進む中、いつまで投資家が、表参道や裏原宿に大きな期待を持ち続けるかは分からない。表参道や裏原宿における都市成長の持続性については、継続的な調査を行い、都市の持続的成長に関する理論的考察を深める必要がある。

シカゴ学派都市社会学の登場以降、都市社会学者は長いあいだ、都市の成長が何を生み出すのかという問いにたいする答えを追求してきたしかし1980年代以降、グローバル経済の進行により、工場が新興工業国へ移転し、大都市の衰退を促した。こうした社会背景のもと、現代の都市社会学においては、何が都市成長を促すのかという切実な問いにたいする答えをも追求し始めている。

近年の都市社会学においては、芸術生産や衣料文化生産が都市成長の原動力となるという視点から、ニューヨーク、シカゴやミラノの中心部を事例とした先行研究が蓄積されてきた。そこで本研究は、東京都渋谷区神宮前における都市細街路が、衰退傾向にあった住宅街から衣料デザインのグローバルな拠点へと変容し、その後、都市細街路・裏原宿と高級街区・表参道の土地建物に対する投資が活発になった過程を明らかにした。衰退傾向の都市細街路が持続的に成長する原動力として、都市衣料文化生産がグローバル経済を牽引する投資を促し、それを支える土台として、地元地域住民によるまちづくりが重要な役割を果たしてきた。

まず、都市衣料文化生産が、サッセンが言及したデリバティブに必要な投資と結びつく。さらに、まちづくりを通じてその土台となってきた住民が、投資のプレイヤーとしての側面をもつようになる。

こうして本研究は、地元住民により形成されたローカルな地域社会と、グローバル経済を牽引する投資に着目し、衣料文化生産が、都市再成長の原動力となる過程を見いだした。それゆえ本研究は、サッセンが述べたグローバル都市、都市衣料文化生産と、地元地域社会を結びつけた現代都市社会学研究として、学術的に位置づけられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 三田 知実	4. 巻 36
2. 論文標題 衣料文化生産主導から機関投資家主導の都市細街路成長へ 東京都渋谷区神宮前の文化生産街区における投資に着目した研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日本都市社会学会年報』	6. 最初と最後の頁 80-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三田 知実	4. 巻 24（2）
2. 論文標題 衣料産業の世界的再編による高級衣料製造業都市の変容 倉敷市児島の都市社会学的研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『アドミニストレーション』	6. 最初と最後の頁 pp.21-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 三田 知実	4. 巻 36
2. 論文標題 衣料文化生産主導から機関投資家主導の都市細街路成長へ 東京都渋谷区神宮前の文化生産街区における投資に着目した研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日本都市社会学会年報』	6. 最初と最後の頁 2018年9月公開
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三田 知実	4. 巻 23（2）
2. 論文標題 熊本市中心市街地におけるファッションブルな細街路の形成過程 都市社会学の観点から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アドミニストレーション	6. 最初と最後の頁 47-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三田 知実	4. 巻 23 (1)
2. 論文標題 グローバル都市・東京における高級衣料の法人取引 渋谷区神宮前を事例とした都市社会学的研究	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 アドミニストレーション	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 TOMOMI MITA
2. 発表標題 Sign Values of Urban Space and Investment: The Case Study of Omote-Sando Upscale Street Inner-Tokyo
3. 学会等名 The 19 th Science Council of Asia (SCA) @Grand Amara Hotel, Nay Pyi Taw, Myanmar (Burma) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MITA TOMOMI
2. 発表標題 The Change of Urban Space in the Close Alleys of Jingu-Mae Shibuya Ward Tokyo: From the standpoint of the Cultural Production and the Global Investment Company
3. 学会等名 The 20th International Conference on Cultural Economics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomomi Mita
2. 発表標題 The Change of Urban Space in the Close Alleys of Jingu-Mae Shibuya Ward Tokyo: From the standpoint of the Cultural Production and the Global Investment Company
3. 学会等名 The 20th International Conference on Cultural Economics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 MITA Tomomi
2. 発表標題 The Change of Urban Space in the Close Alleys of Jingu-mae Shibuya Tokyo: From the standpoints of the Sign Value of Urban Space and the Investment in Real Estate
3. 学会等名 INTERNATIONAL SYMPOSIUM The Wind from the Future: Sustainable Urban Development in East Asian Cities Co-organised by: Rikkyo University & The University of Seoul (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 三田知実	4. 発行年 2022年
2. 出版社 花伝社	5. 総ページ数 224
3. 書名 グローバル化するアパレル産業と都市 裏原宿・表参道の都市社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>研究者情報データベース 公立大学法人熊本県立大学 http://www.pu-kumamoto.ac.jp/site2010/php/researcher/detail.php?id=156&back=c</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------